秋田県のスモン登録患者の推移

豊島　　至（国立病院機構あきた病院脳神経内科）
和田　千鶴（国立病院機構あきた病院脳神経内科）

研究要旨

平成元年当初からの登録患者の推移と検診状況について検討した。当班員は秋田県の患者検診を平成21年に引き継いだが、その際の資料とH21年からの検診記録を見直した。30年間で27名が死亡し、男性78.9±8.3歳、女性83.3±7.6歳で有意に女性が高齢であった。死亡時年齢と出生年は相関し出生年が早いほど死亡時年齢が高齢で、男女別では女性で有意であった。

A．研究目的

平成元年当初からの登録患者の推移と検診状況について検討する。

B．研究方法

当班員は秋田県の患者検診を平成21年に引き継いだ。引継ぎ時の資料とH21年からの検診記録を見直した。引継ぎ時の資料は前年の検診結果と名簿である。H21年度からは、登録者との連絡時、検診時の資料を用いた。

C．研究結果

引継いだのは10名で、検診可能であったもの7名、名簿上のもの3名であった。引継ぎ書類によると平成元年に登録されたものは25名で、平成元年から平成20年までの死亡は13名であった。翌年、この名簿にない患者の存在を患者代表者から告げられ、5名が追加された。さらに、追跡されていない登録患者が判明し、平成21年の引継ぎ時のスモン登録患者は23名で、平成元年での登録者全体は39名であったことが判明した。引継ぎ後の死亡は11名で現在の対象者は12名となった。平成30年で検診可能であったものは2名のみであったので、10名に対しMSWによる電話聞き取り調査を行った。30年間で27名が死亡し、男性78.9±8.3歳、女性83.3±7.6歳で有意に女性が高齢であった。死亡時年齢と出生年は相関し出生年が早いほど死亡時年齢が高齢であった。女性で有意で、相関係数R^2＝0.273であった。現況調査では男性4人、女性7人の状況が判明した。寝たきりは3名ですべて施設入所である。その他は歩行障害があるものの自力移動が可能で、女性に独居者が2名おりADL低下があっ

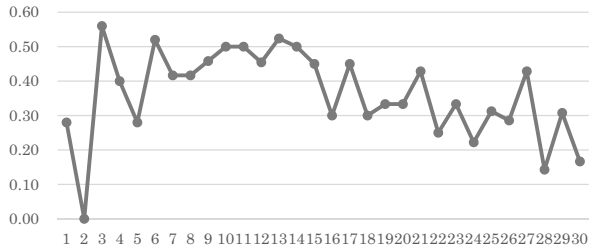

図1　検診率の推移

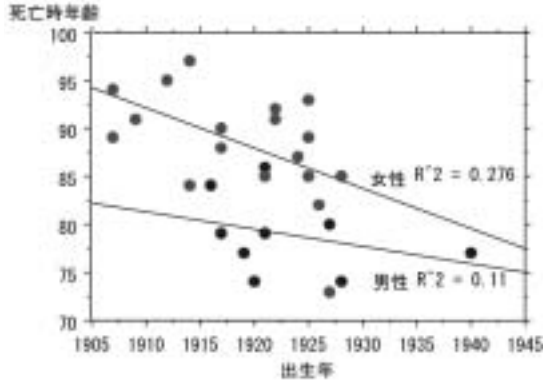

図2　出生年と死亡時年齢の相関

た。検診率はほぼ 30%で推移した。

D．考察

引継ぎ時に全症例の把握が成されていなかったことは意外であった。その時点での未把握者も受給者番号を所持しており、この間の事情については不分明である。また、死亡者の多くは登録番号が目下のところ不明である。

死亡年齢を検討し女性が有意に高齢であったことは、平均余命を考慮すると妥当な範囲と思われた。

E．結論

秋田県のスモン登録患者の推移を検討した。死亡年齢を検討し女性が有意に高齢であった。女性の出生年が早いほど死亡時年齢が高いことについては今後の検討が必要である。

G．研究発表

1．論文発表

1．Toyoshima I. Toxic effect of Clioquinol on vesicular transport in axons of dorsal root ganglion cells. J Akita Natl Hosp. 5 (1): 19-23, 2016

2．Toyoshima I. Titration of clioquinol toxicity on culture cells. J Akita Natl Hosp. 4 (3): 9-15, 2016

3．Toyoshima I. Toxic effect of Clioquinol on anterograde and retrograde axonal transport in axons of dorsal root ganglion cells. J Akita Natl Hosp. 6 (2): 9-13, 2018

2．学会発表

なし

H．知的財産権の出願・登録状況

なし

I．文献

なし